

## 日本語学校における中国人留学生の異文化ストレス と無気力感に関する研究

謝, 延瓊  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/1516135>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 15, pp.53-61, 2014-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 日本語学校における中国人留学生の 異文化ストレスと無気力感に関する研究

謝 延瓊 九州大学大学院人間環境学府

## On the study of the pressure arising from cultural diversity and powerlessness of the Chinese overseas students in Japanese language school

Yanqiong Xie (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The purpose of this study is to examine the pressure arising from cultural diversity and powerlessness of the Chinese overseas students in Japanese language school. The result shows: 1) interpersonal relationship and communication, compared to these students stayed in Japan around three months and one year, these students stayed in Japan over one year and a half feel much more pressure on cultural diversity; 2) studying & career & promotion, compared to these students stayed in Japan around one year and a half, these students stayed in Japan about half year feel much more pressure on cultural diversity; 3) feeling fatigued, compared to these students stayed in Japan around three months, these students stayed in Japan about half year and over one year own much more on the aspect of powerlessness; 4) lack of self-confidence, compared to these students stayed in Japan around three months, these students stayed in Japan about half year and over one year own much more on the aspect of powerlessness.

**Key Words:** the Chinese overseas students in Japanese language school, the pressure arising from cultural diversity, powerlessness, time stay in Japan

## I 問題と目的

### 1. 日本語学校の中国人留学生の特徴

日本では大学などの専門課程に入る前に日本語学校で日本語を学習している外国人は、大学・大学院で学ぶ留学生と異なる就学ビザを持ち、就学生と呼ばれている。2010年7月から「留学」と「就学」の在留資格が一体化され、「就学」が廃棄された。本論文は日本語学校に在籍する外国人学生を「日本語学校における留学生」とする。日本の大学あるいは大学院に在籍する外国人学生を「一般留学生」と表記する。

日本で学ぶ留学生の約7割程度は、日本語学校で2年程度学び、日本の大学などに入り直しており(向学新聞, 2009), 日本語学校は大学進学のための予備校的存在となっている(垣渕, 1993)。日本語学校の在籍期間は来日初期段階であり、日本の留学生活に適應できるかどうかの重要な時期である(邱, 2004)。しかし、このもっとも重要な時期にも関わらず、「一時的な存在に過ぎない」という印象を持たれ(曾, 2007)、社会的な関心は非常に低く、また日本語学校における留学生に関する心理学的な調査及び研究は極めて少ない。

日本語学校における留学生の特徴について、邱(2004)は、①中国人留学生が多いこと、②多くは大学などに進学すること、の2つを挙げている。江(2011)は、日本語学校では、中国人留学生が圧倒的に多く、授業だけで

はなく、日常生活でも密接に繋がっているため、日本語学校において中国人留学生を中心とする独特なコミュニティが形成されていると指摘している。日本語学校の期間は、日本語学校における留学生にとって最も大事な時期である(邱, 2004)。日本で大学に進学できるかどうか、つまり、留学の目的が達成できるかどうかはこの日本語学校の2年間で決まってしまうからである。日本語学校における留学生たちは日本語能力検定試験、私費外国人留学生統一試験、大学入学試験といった試験を経て、やっと日本の大学への進学の道が開ける。この3つの試験をクリアするには、日本語学校の2年間で、日本語のみならず、数学・英語などの科目も勉強しなければならない。従って、日本語学校における留学生は日本語学校での在籍期間が最高2年という規制もあるため、2年間で進学するのは非常に大変なことだと考えられる(江, 2011)。

### 2. 日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスについて

ストレスは、心理学的にはストレスとストレス反応によって成り立つものと理解されている。「異文化ストレス」の定義について、歌川ら(2008)は、異文化を「生活様式や宗教などが(自分の生活圏と)異なる文化」、異文化ストレスを「独自の文化(長い間の生活・習慣・自然環境などに基づいて、価値観・信念・規範・生活様式が確立し、それに生活が影響されている文化)とは異

なった文化に移動したことがストレスサーになり、心身の健康状況に影響を及ぼすこと」としている。本研究は歌川ら(2008)の概念を採用し、異文化ストレスサーを「独自の文化(長い間の生活・習慣・自然環境などに基づいて、価値観・信念・規範・生活様式が確立し、それに生活が影響されている文化)とは異なった文化に移動したこと」と定義する。

在日外国人の異文化ストレスに関して、歌川ら(2008)は在日外国人の中には、日本語によるコミュニケーションの未熟さや孤立感だけではなく、母国以外の文化への接触により、心身共に健康を損ねる者も年々増加していると指摘している。

異文化ストレスを引き起こす要因として、安宮(1994)は個人要因と環境要因を挙げ、個人要因は性格・性別・語学力・滞在年数等、環境要因は日本の文化や自然環境等その個人を取り巻く全ての者が含まれていると述べている。金沢(2001)は、異文化ストレスはある特定の要因によって引き起こされるものではなく、異文化環境そのものがストレスサーとなり、その結果様々な要因が複雑に絡み合って生じるものであると指摘している。

異文化環境に身をおく外国人学生は、本土の一般学生に比べ、新しい環境に適応するという非常に大きな課題を抱えている。稲村(1980)は留学生がこれまで慣れ親しんできたソーシャルネットワークから離脱することに伴って、身体的、心理的な病気が増加したり、不適応を起こしたりすることを示唆している。慣れ親しんだ環境に変化が起きたり、個人の予想を超える大きな出来事に遭遇した場合にリスクが高まり(秋坂, 2008)、「経済」「健康」「言語」「生活」「修学」「人間関係」など(伊藤ら, 1998)といったストレスサーが生じると考えられる。

日本語学校の中国人留学生は他国の留学生と同様、「言語」「進学」をはじめ、さまざまなストレスサーを抱えている。また、彼らの多くは奨学金がなく、生活費や学費を稼ぐために、長時間の肉体労働をし、身体面も負担が大きい(浅野, 1997)。それに加え、二年以内で進学しなければならぬとの規制もあるため、精神的な面にも多大なストレスを抱えている(孫ら, 2007)。

留学生の異文化ストレスサーに関する研究で、箕口(1994)は在日留学生の生活ストレスの実態調査研究を行っている。その結果、在日1-1.5年の群がより多くのストレス項目で高得点を示した。調査対象者は、「人種的差別・偏見」「同国の人と人間関係」「健康状態」「経済的負担」「身分(ビザ・外国人登録)」の問題でより多くの困難を感じていた。一方、在日期間の短い群(1-3ヵ月)では「言葉」の問題を除き、全般的にストレス度が低かった。しかしながら、日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスサーと滞在期間との関連についてはまだ明らかにされていない。

### 3. 日本語学校における中国人留学生の無気力感について

スチューデント・アパシーという用語を用いて大学生の無気力症状がしばしば取り上げられる。もともとアパシーというのは、精神または脳気質の疾患に起因する無感情あるいは感情鈍麻の症状を指し、具体的には「物事に関心がない」「生きていく気力がない」「何にも楽しみを見出せない」という状態をいう(田中ら, 2007)。

スチューデント・アパシーという用語は、Walters(1961)が著書「学生の諸問題」の中で従来のアパシーと区別し「男性性確立に葛藤を持ち、予測される敗北や失敗を恐れ、学業における競争を回避しようとする反応」として提唱された。日本では、笠原・岡本(1975)がWalters(1961)の翻訳を発表し、それによって、日本でスチューデント・アパシー(退却神経症という)という名称が定着したとされている(田中ら, 2007)。スチューデント・アパシーに関しては、心理学のみならず、精神医学の立場からもアプローチがなされている(笠原, 1973)。

田中ら(2007)は現在、日本の大学生の一部はスチューデント・アパシーに陥っていると示唆している。スチューデント・アパシーに陥ると、無気力状態になり、生きがいや目標などが感じられなくなる。そして不安や焦りなどの感情が押さえ込まれるため、表面上は悩みなど持っていないように見えるが、多くの人は自覚できていないため、スチューデント・アパシーは深刻な問題であると指摘されている。

一方、西平(1974)は「無気力感は一の感情ではなくて、孤独感、不安、劣等感、倦怠感、自己嫌悪感、希望喪失、社会に対する不信、無感動などの多くの感情のあわさった総合的な黙然とした生活感情である」と指摘している。

上述のように研究によって無気力感についての説明が若干異なるが、本研究では無気力感を「日常生活全般で、自分をやる気がないと感じること」(下坂, 2001)と定義する。笠原(1987)は、無気力が問題になるのは主に青年期後期であるとして、現代における青年期の長期化が青年の無気力を生む土壌として大きく関係するであろうと指摘している。年齢的には、平均年齢が約22歳(江ら, 2009)の日本語学校における中国人留学生も無気力状態になりやすい時期であると推測できる。

### 4. 異文化ストレスサーと無気力感について

異文化環境に身を置く外国人留学生にとって、異国の日本での生活はこれまでの生活と大きく異なるため、日常的に行っていた行動様式が機能せず、無気力感や喪失感などの否定的な心理状態に陥ることが多い(上原, 1998)。

日本語学校の中国人留学生は高校を卒業して日本に来

るパターンが多く、発達的には青春期という不安定な時期に属する（鄭ら，2007）。両親や友達と遠く離れ、一人で来日して心細く、困った時にも相談相手がなく、情緒的・心理的に不安定になりやすい（江ら，2009）。野島（2007）は、日本語学校の中国人留学生は進学、日本語の重圧をはじめ、カルチャー・ショック、新たな人間関係作り、ネットワークの構築、新しい環境への移行、適応、自立など、さまざまな異なる文化を受容し自国文化へ統合することにより、文化的アイデンティティの揺れ、その確立の難しさも経験すると指摘している。

戸田ら（1989）の報告によると、大学の健康相談室に来院した留学生は在籍留学生数の半分近くであり、利用頻度は一般学生の約4倍であるとしている。その中で、心理的な領域では神経症がもっとも多く、抑うつ傾向のケースも見られたと報告している。

村瀬ら（1996）は Beck Depression Inventory（以下はBDI）を用い、日本語学校における中国人留学生と一般留学生の比較調査を行った。その結果、抑うつ症状が日本語学校における中国人留学生の28.9%に、一般留学生では23.9%に認められた。または不満足感、情動発作と体重減少の項目で一般留学生より有意にBDI値が高かった。経済的に困難が多く、無事に進学できるかどうかを心配する日本語学校における中国人留学生は、一般留学生より強い精神的な負担を抱えていることが示唆された。

垣淵（1993）の研究では、日本語学校における外国人留学生の抑うつ傾向を高くする直接的な影響力をもつ要因は、第一に生活ストレスであった。日本の大学に在籍する留学生を対象としている大橋（2008）の研究によると、異文化ストレス要因は留学生のメンタルヘルスの状態に一番大きく影響していることを明らかにしている。

上述のように、日本語学校における外国人留学生の異文化ストレスと抑うつ傾向に関連があることが示唆されたが、異文化ストレスと抑うつの下位概念である無気力との関連はまだ明らかになっていない。

## 5. 異文化ストレスと滞在期間

異文化への適応・不適応に関わらず、異文化ストレスによって生じた様々な混乱への臨床的対応に関する研究では、異文化ストレスとしての精神症状の発見好発期は2峰性になるという報告が多い（桑山，1998）。移住初期の数カ月間と1～2年後から見られる2つのピークがあり、後者の時期に起こる不適応に基づく疾病は重篤であるという（石川ら，1993）。これは、移住初期に、異なる価値観や習慣をもつ異文化生活に何か適応しようと過剰な努力を続け、長期的にはそれが心身の疲労の蓄積につながり様々な心身症状が出現してくるものである（歌川ら，2008）。

異文化適応と滞在期間の関係について、正の相関があるとする研究（佐藤，1996）、と関連がないとする研究（湯，2004）がある。滞在期間について、先行研究では一致した知見が得られていないため、日本語学校における中国人留学生の異文化ストレス及び無気力感と滞在期間の関連を検討する必要があると思われる。

## 6. 本研究の目的

本研究では、日本語学校における中国人留学生の（1）異文化ストレスと滞在期間の関連、（2）無気力感と滞在期間の関連、（3）異文化ストレスと無気力感の関連を検討することを目的とする。

## II 方法

### 調査対象：

A県の日本語学校に在籍する中国人留学生260名（男性126名、女性134名）。

### 調査内容：

- ①フェイスシート（性別、来日時期、などを尋ねる）。
- ②異文化ストレス尺度：江ら（2009）が作成した日本語学校における中国人留学生の異文化ストレス尺度を用いた（22項目、4件法）。下位尺度は「経済健康」、「勉強進学」、「生活習慣」、「相談相手」、「人間関係」の5つである。
- ③無気力感尺度：下坂（2001）によって作成された青年期全段階用無気力感尺度を中国語に翻訳して用いた（19項目、6件法）。下位尺度は「自己不明瞭」、「疲労感」、「他者不信不満足」の3つである。

### 無気力感尺度の翻訳：

筆者は無気力感尺度を日本語版から中国語版に翻訳し使用した。筆者は大学で3年間日本語を専攻し、その後日本語学校で2年間日本語を勉強した。翻訳した中国語の妥当性を確認するために、日本語が堪能な心理臨床分野の中国人の大学院留学生3名に翻訳した中国語版尺度を確認してもらい、最適な中国語を確定した。

調査時期：2010年12月下旬（日本語能力検定試験と私費外国人留学生統一試験が終わり、その結果がまだ出ていない時期である。）

滞在期間の分け方：本調査は先行研究を参考に、調査協力者の滞在期間を来日時期によって、約3ヵ月、約半年、約一年、一年半以上の4群（約3ヵ月：75名、約半年：53名、約一年：43名、一年半以上：89名）に分けた。調査手続き：日本語学校の授業後に、担任の先生が研究目的を伝え、アンケート調査紙を配布し、その場で回答してもらい、回収した。無記名による質問紙調査である。分析方法：因子分析、1要因分散分析、相関分析。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスサー尺度の因子分析の結果について

中国語に翻訳された日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスサー尺度の22項目について、アルファ因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量の絶対値が.35以上となる項目を採用し、22項目を全て採用した。その結果「経済・健康」「生活習慣」「対人関係・コミュニケーション」「勉強・進路・アルバイト」の4因子が抽出された (Table 1)。因子構造は江ら (2009) のと大きく異なり、他の留学生や日本語学校の先生やバイト先の日本人、日本人の友人、地域住民との関係のような項目で構成された「人間関係」という下位尺度が因子分析により除外された。その原因として、江ら (2009) の調査結果の中で、「日本語学校または先生との関係」項目は異文化ストレスサー尺度各項目得点の下位5位の中に入った。多忙な留學生生活を送っている日本語学校における中国人留学生は、授業やアルバイト時間以外に他の留学生や日本語学校の先生またバイト先の日本人、日本人の友人、地域住民とはあまり接しないため、これらの人たちとは人間関係の面であり問題が

感じられてないと考えられる。

また、「日本語が上達しない」項目は先行研究の「勉強進学」因子から今回の「対人関係・コミュニケーション」因子に移っている。その原因として、日本語学校における中国人留学生にとって、日本語は勉強進学の面より日常生活の中でもっとストレスと感じられていると考えられる。日本語学校に在籍する中国人留学生は全員私費留学で (江ら, 2009)、経済的な面で強くストレスを感じている。親に頼らず、自分の力でアルバイトをして、生活費や学費を稼ぎたい気持ちが強いが、日本語のレベルが低いいため、アルバイトが見つからない、また見つかったても日本語レベルとソーシャルスキルが低いいため (江ら, 2009)、アルバイト先で他のスタッフとは上手くコミュニケーションがとれず、誤解され、差別され、そのため日本語の面でのストレスを感じている可能性があると推測できる。

また先行研究の下位尺度「勉強進学」の中に「アルバイト」という項目が入った。これは、日本語学校に在籍する中国人留学生の中には借金を抱えて日本に来るケースのように全員私費留学であることが考えられる。かつ、日本語学校段階では学費優遇措置がなく、奨学金もほとんどない (浅野, 2004)。そのため、授業料や生活

Table 1  
異文化ストレスサー尺度の因子分析

質問項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
<b>第一因子 経済・健康 (5項目, <math>\alpha=.816</math>)</b>				
家族の病気	.793	-.087	.048	-.096
健康上の問題 (体力・目・耳の衰え)	.738	.092	-.110	.034
借金	.733	.035	-.026	-.077
仕送りの中断	.633	-.068	.019	.065
怪我や病気	.512	.011	.074	.075
<b>第二因子 生活習慣 (4項目, <math>\alpha=.810</math>)</b>				
住居環境の違い	-.008	.893	-.038	-.010
食生活の違い	-.035	.757	-.010	-.005
文化や風俗習慣の違い	-.050	.714	.062	.032
入国管理局など、役所との関係	.269	.419	.024	-.010
<b>第三因子 対人関係・コミュニケーション (4項目, <math>\alpha=.756</math>)</b>				
相談相手がいないこと	-.058	.028	.895	-.108
仲の良い友達がいらないこと	-.014	-.051	.842	.006
差別されること	.074	.109	.404	-.007
日本語が上達しないこと	.142	-.070	.384	.279
<b>第四因子 勉強・進路・アルバイト (4項目, <math>\alpha=.731</math>)</b>				
大学または大学入試の準備	-.040	-.033	-.057	.795
留学生試験	-.039	-.029	-.080	.765
将来の進路や就職の問題	.042	.069	.041	.557
アルバイト	.014	.133	.155	.377
<b>因子相関行列</b>				
	I	II	III	IV
I	1.000	.539	.480	.406
II		1.000	.343	.476
III			1.000	.403
IV				1.000

費を稼ぐために長時間のアルバイトが必要不可欠となっているのが現状で（江，2009），アルバイトは日本語学校における中国人留学生の留学生活の中で進学と同じとても大事な一部分となっているからだと考えられる。

## 2. 無気力感尺度の因子分析の結果について

中国語に翻訳された無気力感尺度の18項目について、一般化された最小二乗法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量の絶対値が.35以上となる項目を採用し、16項目を採択した。「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」の3因子が抽出した（Table 2）。因子構造は下坂（2001）の無気力感尺度とほぼ同じであった。この結果からみると、下坂（2001）が作成した青年期の各学校段階における無気力感尺度は日本の青年だけではなく、日本語学校における中国人留学生にも適用できると示唆できる。

しかし、「自分の人生を真剣に考えるのは面倒である」と「日ごろ目的もない生活をしていて自分がだらけていると感じている」の2項目は先行研究の中では「自己不明瞭」因子に属したが、今回の結果の中では「疲労感」の中に属した。この結果の原因として、言語と文化の差があると考えられる。日本語項目の中には全て「自分」という言葉が表記されていたため、日本人の調査協力者

は「自己」の問題に関して考え、答える可能性が高かったのではないと思われる。そのため日本人を対象とした調査におけるこの2つの項目は「自己不明瞭」に属したのではないだろうか。しかし、中国語では日本語のように主語を省略する習慣があまりないため、「自分」という主語を中国人の調査協力者は特に意識せずに答える可能性が高い。さらに、「面倒である」「だらけている」という言葉を中国語に翻訳すると、それは単に疲れから出てきた状態と捉えられた可能性があるため、今回の調査の中で、この2つの項目は「疲労感」の中に属したと考えられる。

## 3. 異文化ストレスと滞在期間の検討

異文化ストレスと滞在期間の関連を検討するために、滞在期間を独立変数、異文化ストレス尺度の下位尺度の得点を従属変数として、1要因の分散分析を行った。その結果、「対人関係・コミュニケーション」（1年半以上＞約1年、1年半以上＞約3ヵ月  $F(3,259)=4.550, p<.01$ ）と「勉強・進路・アルバイト」（約半年＞1年半以上、約半年＞約1年  $F(3,260)=3.731, p<.05$ ）について、有意な差が見られた。

「対人関係・コミュニケーション」について、滞在期間約一年と約3ヵ月の学生より一年半以上の学生の方が

Table 2  
無気力感尺度の因子分析

質問項目	因子負荷量		
	I	II	III
<b>第一因子 他者不信不満足 (6項目, <math>\alpha=.866</math>)</b>			
周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる	.983	-.208	.038
私には本当に困った時に助けてくれる人がいない	.769	.036	-.109
私の周囲の人たちは面白みが欠けると思う	.745	.065	-.014
周囲の人たちに助けを求めても無駄だと思う	.677	.024	.028
私を本当に理解してくれる人は少ないと思う	.635	.270	-.389
私は自分つまらない人間のように感じる	.569	-.036	.278
<b>第二因子 疲労感 (6項目, <math>\alpha=.864</math>)</b>			
日ごろ精神的に疲れたと感じる	.000	.911	-.185
多忙な毎日で疲れて何もしたくなる	-.137	.736	-.050
日ごろの生活の中で体がだるいと感じる	.055	.698	.072
自分の人生を真剣に考えるのは面倒である	.052	.649	.031
日ごろ目的もない生活をしていて自分がだらけていると感じる	.108	.580	.089
私は毎日の生活で疲れを感じている	.107	.544	.266
<b>第三因子 自己不明瞭 (4項目, <math>\alpha=.658</math>)</b>			
私は将来の目標を持って生きている※	.076	.124	-.706
私は何事にも前向きとり組む意欲があると思う※	.100	.011	-.488
私には自分らしさが無いと思う	.094	.264	.469
私の未来にはあまり希望がないと感じる	.292	.093	.430
<b>因子相関行列</b>			
	I	II	III
I	1.000	.714	.608
II		1.000	.548
III			1.000

※は逆転項目

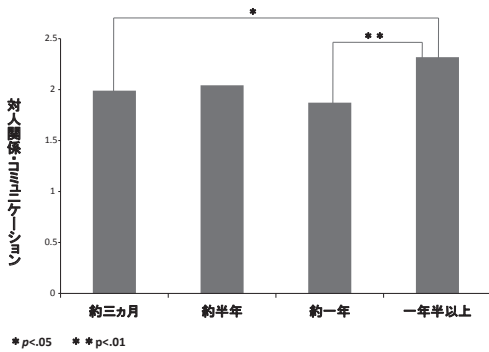


Fig.1 異文化ストレスラーにおける「対人関係・コミュニケーション」の滞在期間の差

ストレスラー得点は有意に高かった (Fig.1)。

これは、来日一年半以上の学生は滞在期間が一番長いこと、また本調査の調査時期は12月下旬であったため、彼らにとって日本語学校での最後の日本語能力検定試験と私費外国人留学生統一試験が終了し、例えば今生活している地方に残るか、大学を受験するなど、といった重大な選択をしなければいけない時期になる。つまり、彼らは自らの一年半以上の留学生生活をもう一度整理し、考えるようになる。しかし、同時にこの時期に自分が直面している問題に対して、本当に相談に乗れる人は少ないと思われる。江ら (2009) の調査によると日本語学校における中国人留学生のソーシャルサポート源の上位三位は:「家族・親戚」「日本にいる同国の友人」「中国にいる友人」であった。しかし、家族や親戚、中国にいる友人たちは日本のことはよく知らない上、精神的な応援以外、現実的に役に立つ意見を出すのはなかなか難しいと思われる。日本にいる同国の友人も同級生やクラスメートが多く、友人であると同時に、ライバルであるとも言えるので、相談するのは容易ではないと推測でき

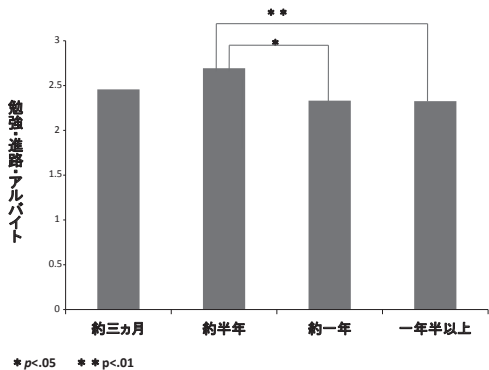


Fig.2 異文化ストレスラーにおける「勉強・進路・アルバイト」の滞在期間の差

る。また一般的に日本の大学や専門学校入試は面接があるため、自分の日本語能力に関してもストレスを感じるようになると推測できる。

また、「勉強・進路・アルバイト」について、滞在期間約一年、一年半以上の学生より約半年の学生の方が異文化ストレスラー得点は有意に高かった (Fig.2)。その原因として、来日約半年の学生は日本の環境に慣れ始め、日本語学校卒業までの学習内容がわかることで、現状を把握し、進路のことを考え、自分が本当に卒業までに目標を達成できるかどうかを心配し始める時期である。その後現実的な生活と向き合いながら、この面のストレスは減少すると考えられる。また、全員私費留学のため、経済問題は大きな壁となり、授業料や生活費を稼ぐために長時間のアルバイトが必要不可欠となっているのが現状である (江ら, 2009)。近年、日本経済が不況で、アルバイトを探しにくく、来日半年が経ち、アルバイトを見つけれない学生やアルバイトを見つけても、アルバイトが自分の生活へどのような影響を与えるかまだ認めることができない等、深く悩む学生もかなり存在している。以上のことより、「勉強・進路・アルバイト」の面に約半年の学生は他の期間の学生よりもよりストレスを感じていると考えられる。一方で、滞在期間約一年と一年半以上の学生は約半年の学生より、より日本の環境に慣れ、勉強進路やアルバイトに関して、より現実的に考えるようになったため、来日半年ぐらいの学生よりも「勉強・進路・アルバイト」の得点は低かったと考えられる。

#### 4. 無気力感と滞在期間の検討

無気力感と滞在期間の関連を検討するために、滞在期間を独立変数、無気力感尺度の下位尺度の得点を従属変数として、1要因の分散分析を行った。その結果、「疲労感」(一年半以上 > 約三カ月, 約半年 > 約三カ月  $F(3,260)=4.826, p<.01$ ) と「自己不明瞭」(一年半以上 > 約三カ月  $F(3,260)=3.441, p<.05$ ) について、有意な差が見られた。

「疲労感」について、滞在期間約三カ月の学生より約半年、一年半以上の学生の方が無気力感得点は有意に高かった (Fig.3)。その原因として、来日一年半以上の学生は日本語学校での勉強は最終段階となり、1年半頑張った結果も間もなく出る時期である。進学のための学費や引越し代や生活費を稼ぐために、アルバイトもしなければならず、三ヶ月後には日本語学校を卒業し、新生活が始まるという時期になり、日本語学校をやっと卒業するという気持ちがある一方で新たな未来に対する心配と不安も持ち合わせており、精神的に疲れていると考えられる。石川ら (1993) は移住1~2年後の時期に起こる不適応に基づく疾病は重篤であると指摘している。

「自己不明瞭」については、滞在期間約三カ月の学生

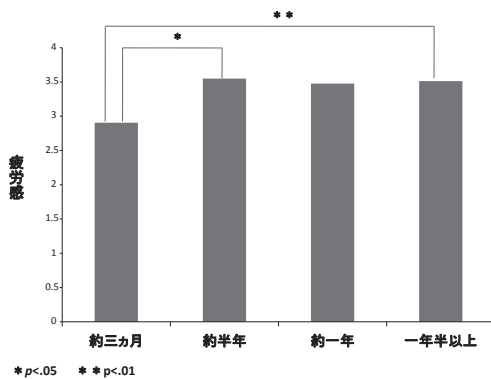


Fig.3 無気力感における「疲労感」の滞在期間の差

より一年半以上の学生の方が無気力感得点は有意に高かった (Fig.4)。その原因として、来日約三ヶ月の学生はまだ日本に来たばかりであり、留学生活に対する新鮮味があり、未来への憧れと留学生活に高い期待を持ち興奮した時期であるが、来日一年半以上の学生は、日本語学校の生活がそろそろ終わり、2年間で勉強した知識でどの様な大学に行けるか、理想と現実の格差に気づき、将来について迷う時期であると思われる。大学受験に対する不安と新生活に対して、決断は全て自分でしなければいけない。頼りになる親も母国におるため、相談し辛いということも考えられ、人生に対して一人心細い状態であると考えられる。

##### 5. 異文化ストレスと無気力感の関連

異文化ストレスと無気力感の関連を検討するために、両尺度の下位尺度の得点の相関係数を求めた。その結果、異文化ストレス尺度の下位尺度「経済・健康」「生活習慣」「対人関係・コミュニケーション」「勉強・進路・アルバイト」と無気力感尺度の下位尺度「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」の間はすべてにおいて正の相関が見られた (Table 3)。

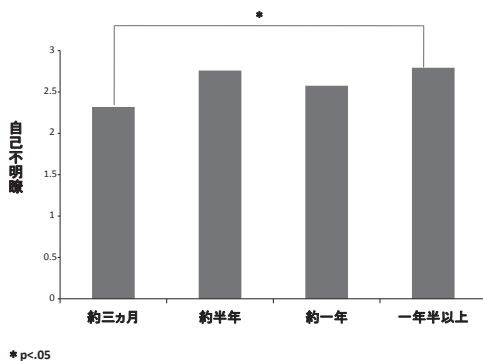


Fig.4 無気力感における「自己不明瞭」の滞在期間の差

はじめに、異文化ストレス尺度の下位尺度「経済・健康」と無気力感尺度の下位尺度「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」について考察する。経済健康の面にストレスを感じている日本語学校における中国人留学生は周りの人に助けを貰いたいが、相手から嫌われるか、信用されないかもしれないという心配があると考えられる。その結果、他者を信頼せず問題は全て自分の力で解決するようになり、他者と信頼関係を作る機会を失ってしまふ、他者に対する信頼と満足が高くないと推測できる。また、留学生活の中で直面する問題を全部自分一人で対応するのは精神的にストレスが高く、時間がたつほどに、疲労感を感じるようになると思われる。そして、本土にいる友人や日本にいる先輩と自分を比べ、理想と現実の落差を実感し、自己に対する将来の展望を見失う傾向があると考えられる。

次に、異文化ストレス尺度の下位尺度「生活習慣」と無気力感尺度の下位尺度「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」について考察する。金沢 (2001) が異文化ストレスはある特定の要因によって引き起こされるものではなく、異文化環境そのものがストレスとなり、その結果様々な要因が複雑に絡み合っているものであると示唆している。異国で生活すること自体、日本語学校における中国人留学生にとってストレスとなる。生活習慣の変化に対応するために、自国とは異なる文化に接し、カルチャー・ショックを経験し、それが長時間にわたり、疲労感を感じるようになると考えられる。また日本語学校における中国人留学生のソーシャルサポート源は主に「家族・親戚」「日本にいる同国の友人」「中国にいる友人」(江ら, 2009) である。しかし、日本で生活している同国の友人は皆勉強、アルバイトで自分のことで精一杯であり、友達の助けや援助が必要なきに日本にいる同国の友人から援助を得られない可能性が高い。その一方、家族・親戚や中国にいる友人はサポートをすることが難しいと考えられる。それにより、他者に対する信頼感や満足感が高くなると推測できる。自分が日本に来て日本にいる意味、自分の人生の生きがい等について、もう一度自らの人生を整理するようになり、今の自分と将来の自分に自信を持てなくなる可能性もあると思われる。

さらに、異文化ストレス尺度の下位尺度「対人関

Table 3  
異文化ストレスの下位尺度と無気力感の下位尺度間相関

	他者不信不満足	疲労感	自己不明瞭
経済・健康	.34**	.35**	.33**
生活習慣	.35**	.38**	.29**
対人関係・コミュニケーション	.26**	.24**	.23**
勉強・進路・アルバイト	.29**	.40**	.26**

\*\* $p < .01$



係・コミュニケーション」と無気力感尺度の下位尺度「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」について考察する。対人関係、他者とのコミュニケーションは他者への信頼と満足度と強い関連があると考えられる。社会経験が少ない日本語学校の学生は、来日後同国の先輩や同級生との付き合いが多くなるが、周囲の同胞は母国にいた時の学校の友人や同級生と異なる。そのため、他者に対して距離を置き、警戒心をもつようになる。勉学、経済的な面に多大なストレスを抱えている彼らは、このように信頼感が薄く、本心で付き合える友達が少ない環境の中にいる。そこで長時間いることにより、疲労感を感じ、これから人生の意味を確信できなくなり、展望を見失う可能性が高いと推測される。

加えて、異文化ストレス尺度の下位尺度「勉強・進路・アルバイト」と無気力感尺度の下位尺度「他者不信不満足」「疲労感」「自己不明瞭」について考察する。江ら(2009)の調査によると日本語学校における中国人留学生がストレスを感じたのは進路や日本語など、勉学のことに集中している。勉強・進路の面で高いストレスを感じている日本語学校における中国人留学生は勉強の面で他の留学生に助けを求めても、同じ立場、同じ能力レベルの仲間が多く、助けを得られないのが現状である。また、ライバル同士でもあり、お互いに信頼するのは難しいことになると思われる。また、勉強・進路・アルバイトの面での失敗や挫折も経験するであろう。二年間に対応すべきことは想像以上に多く、困難であり、自身に対する自信が持てなくなる傾向が高いと考えられる。

#### IV 本研究のまとめ

本研究は、日本語学校における中国人留学生の異文化ストレス、無気力感と滞在期間の関連、異文化ストレスと無気力感の関連を明らかにすることを目的として調査研究を行った。

一般留学生を対象とする箕口(1994)の研究では、在日期間の長い群(1-1.5年)が短い群(1-3ヵ月)と比べて、より多くのストレス項目で高得点を示した。具体的には、「人種差別・偏見」「同国の人との人間関係」「健康状態」「経済的負担」「身分(ビザ・外国人登録)」といった項目で高得点を示した。一方、在日期間の短い群(1-3ヵ月)は「言葉」の問題を除き、全体的にストレス度が低いという結果であった。本調査では日本語学校における中国人留学生の中で、滞在期間が一番長い来日一年半以上の学生が、滞在期間約三ヵ月や約一年の学生より「対人関係・コミュニケーション」におけるストレスの得点が有意に高かった。また、滞在期間約半年の学生が滞在期間約一年や一年以上の学生より「勉強・進路・アルバイト」におけるストレスの得点が

有意に高いという結果が得られた。滞在期間一年半以上や約半年の学生のこのような特徴は、一般留学生と日本語学校における留学生の在日期間中の各段階の課題が違いためであると考えられる。

先行研究の中に、異文化環境に移住して1~2年後から起こる不適応に基づく疾病は重篤である(石川ら, 1993)ことが示されている。これは、移住初期に、異なる価値観や習慣をもつ異文化生活になんとか適応しようと過剰な努力をし続け、長期的にはそれが心身の疲労の蓄積につながり様々な心身症状が出現してくるためである(歌川ら, 2008)との指摘があった。本研究で滞在期間一年半以上の学生は滞在期間約三ヵ月の学生より「疲労感」「自己不明瞭」における無気力感得点が有意に高いという結果が得られた。この結果から、日本語学校の中国人留学生は進学、日本語の重圧をはじめ(野島, 2007)異文化環境の中でたくさんの課題と向き合っていると考えられる。さらに、日本語学校の最終段階となると疲れを強く感じ、自己不明瞭状態に陥りやすいと推測できる。

以上のことから日本語学校における中国人留学生は、滞在期間の各段階に異なるストレスを感じつつそれらと向き合い、時間の経過に伴い理想と現実の格差に気づき、疲れを感じ、無気力感を強く感じるようになると推測できる。

#### 2. 今後の課題

(1) 本研究は異文化ストレス、無気力感と日本語学校における中国人留学生の滞在期間の関連を検討した。先行研究では滞在期間が長く、日本語能力が高いと適応が促進される(佐藤, 1996)との指摘もある。そのため、今後異文化ストレス、無気力感と日本語学校における中国人留学生の日本語能力の関連を検討することが課題になる。

(2) ストレス理論からみると異文化ストレス、無気力感はストレスコーピングと密接な関係がある。今後日本語学校における中国人留学生のストレスコーピングを組み入れて、異文化ストレス、無気力感を検討する必要があると思われる。

#### 謝辞

本論文は、平成23年度九州大学大学院人間環境学府研究生論文をもとに加筆修正したものである。本論文作成にあたり、丁寧にご指導いただきました基幹教育院の福岡留美教授に感謝申し上げます。

#### 引用文献

秋坂真史(2008). メンタルヘルスケアの概要(Ⅰ)内山源・秋坂真史(編集)メンタルヘルスケアハン

- ドブック同文書院, 1-22
- 浅野慎一 (1997). 日本で学ぶアジア系外国人—研究生・留学生・就学生の生活と文化変容—大学教育出版
- 石川俊夫・高橋進 (1993). 異文化ストレスと心身症 ころの科学 **49**, 75-79
- 伊藤武彦・井上孝代 (1998). 全国高等教育機関の留学生相談の実態調査第1報告 井上孝代 留学生の中途退学に関する異文化間心理学的研究 平成8年度・9年度科学研究費補助金(基礎研究C)研究成果報告書, 6-38
- 稲村 博 (1980). 日本人の海外不適応 日本放送出版社
- 稲村 博・松崎一葉・米沢 宏ら (1993). 外国人労働者の異文化適応障害に対する精神医療保険システムに関する研究 メンタルヘルス岡本記念財団研究助成報告集 **5**, 27-32
- 歌川孝子・丹野かほる (2008). 在日外国人の異文化ストレスに関する研究の動向—異文化ストレスの実態と地域保健活動の課題— 新潟大学医学部保健学科紀要 **9** (1), 131-137
- 大橋敏子 (2008). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 京都大学学術出版社
- 垣淵洋一 (1993). 日本語学校に在籍する就学生・留学生の精神健康に関する研究 筑波大学大学院博士課程医学研究科 博士号論文 (未公開)
- 笠原 嘉 (昭和48). 「現代の神経症—特に神経症性 apathy (仮称) について」(「臨床精神医学」2-2) 国際医書出版
- 笠原 嘉 (1987). 「青年期の無気力」研究から 名古屋大学教育学部附属中等高等学校紀要 **32**, 107-111, 1987-08-15
- 金沢吉展 (2001). 異文化ストレスとは、異文化と付き合うための心理学。誠信書房, 東京, 113-116
- 上原麻子 (1988). 留学生の異文化適応：言語習得および異文化適応：理論的・実践的研究 (広島大学教育学部)
- 桑山紀彦 (1998). 地域における異文化間メンタルヘルス「外国人花嫁」のメンタルヘルス, ころの科学 **77**, 79-82
- 江志遠・顧佩靈・李欣擘・李曉霞・韓海錦・野鳥一彦 (2009). SDS と GHQ による在日中国人就学生のメンタルヘルスに関する実態調査—基礎的属性的観点から—九州大学総合臨床心理研究 **1**, 121-132
- 江志遠 (2011). 日本語学校における中国人就学生のメンタルヘルスに関する研究および心理援助の現状と課題 九州大学総合臨床心理研究 **3**, 199-208
- 向日新聞 (2009). 留学・就学の一体化提言 特定非営利活動法人国際留学協会 2009.3
- 佐藤真理子 (1996). 留学生の異文化適応—基礎的諸属性との関連— 比較・国際教育, **4**, 31-41
- 下坂 剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究 **49**, 305-313
- 田中 存・菅 千索 (2007) 大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ 和歌山大学教育学部紀要 教育科学 **57**, 15-102
- 邱焱 (2004). 中国人就学生が必要とする日本語学校のサポート尺度の作成 東京大学教育研究科 修士論文 (未公開)
- 孫穎・江志遠・曾小榮・鄭艷花・李曉霞・李欣擘・広梅芳・野鳥一彦 (2007). GHQ による日本語学校の中国人就学生のメンタルヘルスに関する調査 (2006年度) 母国語 (中国語) による日本在住の就学生の心理援助に関する研究 平成17・18年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書 13-22
- 曾小榮・鄭艷花・孫穎・李曉霞・広梅芳・野鳥一彦 (2007). 日本語学校の就学生への母国語 (中国語) による心理支援の試み I—エンカウンター・グループ方式による— 平成17・18年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書, 23-32
- 鄭艷花・孫穎・李欣擘・江志遠・李曉霞・広梅芳・曾小榮・野鳥一彦 (2007). 日本語学校の就学生への母国語 (中国語) による心理支援の試み II—エンカウンター・グループ方式による—平成17・18年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書, 33-42
- 戸田安士・加藤雄一・佐藤祐造・近藤孝晴・押田芳治 (1989). 外国人留学生の保健管理に関する心身医学的考察 第一報—身体健康相談事例の全体像から心身医学 **29** (抄録), 139
- 西平直喜編集 (1974). 「現代青年の意識と行動」(1) 大日本図書
- 野鳥一彦 (2007). 母国語 (中国語) による日本在住の就学生の心理支援に関する研究 平成17・18年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書 1-3
- 村瀬さな子・村瀬澄夫・北畠正義・山内 徹 (1996). 中国人留学生及び就学生の精神保健 Beck Depression Inventory による比較調査 日本公衆衛生雑誌, **43** (5), 398-402
- 箕口雅博・江川 緑 (1994). 在日留学生の生活ストレス実態とその関連要因に関する研究 日本教育社会学会発表要旨集録 (46), 74-75 安宮理恵：我が国のカルチャー・ショック・文化摩擦研究の展望, 日本社会精神医学界雑誌 Vol.2 No.2, 105-111, 1994
- 安宮理恵 (1994). 我が国のカルチャー・ショック・文化摩擦研究の展望, 日本社会精神医学界雑誌 Vol.2 No.2, 105-111, 1994
- 湯玉梅 (2004). 在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人困難行動上の困難の観点から 国際文化研究紀要 **10**, 293-327